

他にもこんな すごいすと

大震災30年 設立45年“まちづくりの老舗”が アップデートする地域防災



地域力で阪神・淡路大震災から
力強く復興を遂げた、神戸市長田区の
真野地区まちづくり推進会



長年にわたって育んできたコミュニティで、30年前の震災時も助け合った真野地区。今でも、お茶会や映画会、祭りなどのイベントを通じて住民・学校・企業が交流し、世代や民族も超えて「つながりを深めること」を忘れてはいない。経験を糧にしつつ、最新の避難所運営の勉強会を開くなど、時代に合った防災対策も進める。「次の災害に備えて、切り替えて新しいことを」(事務局長・中村博文さん)



150年ぶりに復活した “えびすかき”の継承 亡き座長の姿を頼りに、 仲間が、弟子たちと



故・武地秀実さんから
えびすかきを受け継ぐ
人形芝居えびす座
松田 恵司 さん



継承するのは肩書きや芸だけじゃない。西宮神社に伝わるえびすかきを後世に残そうとした武地秀実さんの決意、仲間を大切にする姿勢、観る人に喜んでもらいたいという想い。二人三脚で歩んだ18年の間に受け継いだものを胸に、再スタートを切った松田さん。弟子とはまだ阿吽の呼吸とはいかないが、日々稽古を重ねながら継承の第一歩を踏み出した。



SDGsのヒントは「遊び心」？ いろんなモノが共存する 「現代版里山」で 自然がもっと身近に



学びと遊びの場として、
2006年から里山保全活動を始めた
NPO法人はりま山研究所
熊谷 哲 さん



環境の保護だけでなく「ガーデニング」や「人工物」を取り入れた里山保全活動を行う熊谷さん。ココでは里山が「人が気軽に自然と関われる場」として機能する。廃材を活用したツリーハウス建設、子どもの遊び場づくりや音楽イベントの開催など。時代に合わせて活動の形を変えることで、人の営みと環境保全を両立させていく。



Report | 交流会レポート |

すごいすとの熱量を体感！ 会場中が、対話と発見の場に

自らの“好き”に向き合い、20代や30代で挑戦した「すごいすと」5人が登壇。一歩踏み出す勇気や活動の喜び、苦悩を語った。約30人の参加者も「挑戦」を語り合い、「人と人をつなきたい」「映画の自主上映をしたい」など熱い声が飛び交う場面も。



まだまだ読み足りない方は
すごいすとWebマガジンへ！



PODCAST
“聴くすごいすと”
「すごいすと」の生の声を
ポッドキャストで配信中！



お問い合わせ・連絡先
兵庫県 県民躍動課
神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
電話：078-341-7711(代表)

発行日：2025年2月15日

すごいすとは 「自分×仲間×地域」の 熱量を携える「ひと」

兵庫県には、各地さまざまなシーンの中で、
圧倒的な熱量を発する「ひと」が数多く存在します。
そんな、スゴい「ひと」を私たちは「すごいすと」と呼びたいと思います。

このタブロイド紙は、すごいすとWebマガジンからピックアップして構成しています。

166人 | 32団体

「競わない」 ランニング文化

GPSランナー



01



異色のすごいすと
志水 直樹 さん

走ることで、伝えられることがある

ランニングアプリを使って、地図上に「走った軌跡」で文字や絵を描くGPSアート。志水さんは「ココを走った、歩いた」がカタチになるワクワク感を、健康、まちづくり、教育、環境など多様なテーマと結びつけ、誰もが参加できるイベントに。コロナ禍ではオンライン上で「各自の軌跡」を連結させ世界へ発信、ユーザー数60万人超えというadidasの公式Instagramで紹介された。2016年「西宮LOVE」の作品から始まった活動は「走ること」の新たな価値として、国内外に広がっている。

小学校教師を経て、
2019年に世界初の職業
「GPSランナー」としての活動を開始

02

異色のすごいすと

屋台と図書館と医療

「コーヒーを飲みませんか？」
少し不思議そうな顔で人が集まり、
自然に会話が生まれる



医師・「だいかい文庫」店主

守本 陽一 さん



「医療の正しさを伝えるだけでは、人は動かない」
白衣を脱いだ医師や看護師がまちかでコーヒーをふるまい、まちのひととの世間話のなかでは健康相談も。豊岡市のシェア型図書館『だいかい文庫』には、本好きの人だけでなく、休職中のひと、不登校生など「自分は独りだ」と感じる人たちが訪れる。健康にも影響するという「孤独」を抜け出すための居場所をつくり、楽しみながらさりげなく寄り添う守本さん。医師として治療だけでなく「その人らしく生きる」ためのつなぎ手としてまちに出る。



オーダーメイド
整形医療靴の店
「&MIKI」

菅野 ミキ さん



「この靴に合う服を買いに行きたい!」というお客さんも
「自分は障がい者だから靴を自由に選ぶことはできない」。義肢装具士の仕事を通じて、靴に対する様々な想いや困りごとを聞いた菅野さん。整形医療靴でも機能性とデザイン性の両立を目指す。“履ける靴”自体が少ないため「自分の好きな靴がわからない」という多くの人と対話しながら「本当に履きたい靴」を形に。「この靴に合う服を買いに行きたい!」と声を弾ませる人もいます。

03

異色のすごいすと

靴職人 × 義肢装具士



足にトラブルを抱えている人たちをサポートする
「整形医療靴」が店内に美しく並び

「島」のすごいすと —淡路島と家島—



淡路島と家島。規模は違えど、少子高齢化、人口減少の課題は同じ。
各島で地域を盛り上げようと長年活動を続けてきたふたりが語り合う。

淡路島



NPO法人淡路島アートセンター

やまぐち くにごん

地元・淡路島にリターン。島内でアートプロジェクトや雇用創造プロジェクトに携わる

家島



いえしまコンシェルジュ株式会社

中西 和也 さん

家島にほれ込み大阪から移住。島内ガイドのほかイベントなどで島の魅力を発信している

『大企業の社員が1300人、島に移住』、
それって島ちゃうやん! (笑) ——— 中西さん

“ふかふかのお布団”のような関係性を、
どれだけ島の中に敷けるか ——— やまぐちさん

今、島が人気ですね。

中西 家島でいうと、一番は「船に乗ってしか行けない」というところですね。船に乗ることで気持ちがりセットされるというか、変わるものがきつとあると思うんです。

やまぐち 淡路島は橋が架かっていて、面積も広いから島という感じがしないかもしれない。でも、訪れる人からは「橋を渡ることがひとつのスイッチになって、島ではいつもと違うのんびりしたルーズな体験ができる」というようなことをよく聞きます。

中西 確かに! 「淡路島なんて橋があるから島じゃない」っていう人もいますが、僕も淡路島に行くとき、あの橋を渡ったらテンションが上がります。船に限らず、海を渡ることが非日常へのスイッチなのかもしれないですね。

「島のプレーヤー」について尋ねると。

中西 (やまぐちさんは) 以前は「淡路島を耕す女」としてバリバリ活動していました。

やまぐち そう、それが今は風の海のように(笑)。というのも、地域に根付いて活動する「プレーヤー」となる移住者が近年すごく増えたんです。以前は何でも自分でやらねば、といういろいろな活動をしてきたけれど、今は他のプレーヤーを見守り、応援する立場になっていきますね。

中西 家島も、徐々にですがプレーヤーは増えています。でもまだまだ足りないのが現状。地道な活動の延長線上に、家島のプレーヤーを増やしていかなければ!

“島の人たち”といえば。

中西 家島の人は、いい意味でおせっかいなんです。うちの社員が港でぼーっとしていたら、近所のおばちゃんが「元気ないやん!」って声をかけてくれて。人とのほどよい距離感が分かっているというか。

やまぐち そういう人のよさや居心地のよさって、暮らしににじみ出てくるものですね。会っただけで幸せを感じたり充実感を得られたり。そんな“ふかふかのお布団”のような関係性を、淡路島の中にもどんどん広げていきたいです。

時折するどいツツコミを入れながら近況を探り合うふたり。島のある話にふふっと笑い、それぞれが見据える「これから」にうなずき合う...



異色のすごいすと

想いをカタチにする、それぞれの色

時代の変化と すごいすと

変貌を遂げる社会の中で、
活動を深化させてきた
「すごいすと」たち。
時代を読む、感性の鋭さに注目!



04

異色のすごいすと

加東市で 出版社



「スタブボックス」代表

高橋 武男 さん

地元愛、
というわけではなく

執筆から出版、営業まで全てこなす「ひとり出版社」をあえて地元で——高橋さんにあるのは、「田舎もんを、なめんなよ」という反骨心と「地方だからできること」への想い。大手出版社の旅行雑誌のような地域の切り取り方ではなく、地元の人たちが自らの目線で深く考え、あぶり出していく地域のおもしろさを本にまとめて、全国の書店に並べられたら。そのプロセスにも価値を置く挑戦は、地域の将来も見据える。



編集・発行を手掛けた本には
「地域おこしは、人おこし。」
というフレーズも



192

きっかけはコロナ禍

倉庫に溜めていた“ハギレ”が新たなものづくりへ

経済活動が停滞したコロナ禍。ハギレを使ってマスクを生産すると、販売することにすぐ売り切れた。「生かせずにいたものをうまく循環することができた」と玉木さん。ハギレをワークショップなどに無料配布する企画を開始するなど“アップサイクル”を生み出している。



ブームで終わらせない

“映えスポット”で向き合うクリエイティブと挑戦

#きらきら坂として、近年SNSで話題の赤穂市御崎。ここにアトリエ業店舗を構えるオカモトさんは、殺到した観光客に戸惑いも覚えたが、近隣に新設したアトリエに制作拠点を移し、お店では気軽なガラス体験を計画。「若い人にも工芸品の魅力を伝えたい」と奮闘する。



20年来の構想を実現!

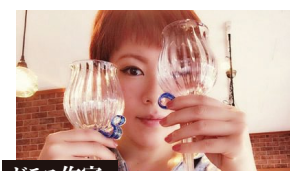
インバウンドに「IT活用」でおもてなし

「外国人観光客のため、街歩きの英語音声ガイドを作ろう」と玉田さんが発案したのは約20年前。携帯音楽プレイヤー「iPod」と紙の地図を組み合わせた企画だったが実現せず。時は経ち、スマホのGPS機能を利用したガイドアプリを開発し2024年リリース。ようやく時代が追いついた。



播州織作家、
「tamaki nime」デザイナー

玉木 新雄 さん
一点モノにこだわったショールや服で「新たな播州織」を発信している



ガラス作家、
「御崎ガラス舎」オーナー

オカモト ヨシコ さん
多様な手法のガラス工芸作品を生み出し、飲食店などのコラが企画も手掛ける



NPO法人姫路コンベンションサポート
代表理事

玉田 恵美 さん
「まちをオモシロくしたい人を全力でサポートする」をミッションに活動